

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ㉓

地域ごとの種の変化と種内変化の
多様性～照葉樹林・ラン科植物～

五月下旬、no i k y o t o
の仲間と和歌山友が島に日帰り例
会をするようになりました。いつ
もと違いマイクロバスを借りて少
し遠出です。私にとっては植物観
察としてはあまり出かけたことの
ない地域です。

京都や滋賀と違い、全くの照葉

樹林で海岸性気
候です。どの様
な植生・植物相
が見られるか興
味津々で、行く

前からワクワクしていました。

泉州あたりから車窓に見る風景
に少し違和感を感じました。それ
は山々に見える緑の色でした、季
節の進行が早いのと常緑樹の多さ
によるものだとなりました。加
太に着くとフェリーは欠航です。
残念なことに友が島には渡れませ
ん。急遽、観察地を加太国民休暇
村の砲台跡をめぐる散策路と加太
海岸、森林公園に変更しました。

休暇村駐車場でバスを降りると
トベラとシャリンバイの花が沢山
咲いていました。この二つは京都
でもよく見かけますが、それは公
園や生垣、分離帯などに植えられ



トベラ



シャリンバイ

たものばかりです。ここにあるも
のは自生で背丈も高く伸びていま
す。カシ類も多く、特にウバメガ
シが大きく育ち林を形成していま
す。さすが紀州は備長炭の産地で
す。ウバメガシも京都には多く見
られますがどれも植栽です。さら
に林の中を進んで行くとタブノキ、
アオガシ、カゴノキ、ヤブニツケ
イ、ヤブツバキなどの照葉樹林で
す。特にトベラ、シャリンバイ、
タブノキなどは海岸性の植物で京
都中南部では自生を見る事があり
ません。以前滋賀から鈴鹿の山に
行ったとき、石樽（いしぐれ）峠
を越えました。石樽峠は滋賀と三



ミズバイ

重の県境です。その時、滋賀から三重に入ったとたんにタブノキが群生していたことを思い出しました。まさに海岸性植物であることの実証だったのを憶えています。さらに進むと、今まで見た範囲のものとは少しちがう樹木を発見。幾つか似た植物を思い浮かべるのですが、少しずつ引っかかりがあります。最も引っかかる点は葉の長さです。もう一度木をよく見ると、枝先に花の痕がありました。徐々に科の範囲が絞られ、図鑑を頼りにハイノキ科を調べたらありました。ミミズバイでした。今ま

で図鑑では知っていましたが実物は初めてです。実に驚くやら嬉しいやら。知らないものを一つずつの各部位を図鑑と見比べ、同定に至る過程は推理小説の犯人を捜すようなドキドキ感とワクワク感があります。そして解決に至れば達成感と爽快感が満ちてきます。この日もう一つの喜びがありました。トサムラサキの確認です。事前の予備知識として加太周辺にトサムラサキがあることと特徴を知っていました。ムラサキシキブの近似種です。何人もの学者が調査に入りましたが、ムラサキシキブと認識されて調査報告に掲載されませんでした。今ではムラサキシキブとは別種のトサムラサキとして確認されています。

海に近づいた頃、明治時代に紀淡海峡守備に造られた深山砲台の

跡があらわれました。そこからは友が島、淡路島などの眺望が美しく見られました。

加太海岸に移りました。ハマヒルガオ、ハマアザミ、トベラ、シャリンバイ、ハマダイコン、ハマボツス、ハスノハカズラなどが見られました。さすがに海岸、ハマの名が接頭辞のように付いています。この中ではハマボツスが満開で目を引いていました。ハイハマボツス（環境省準絶滅危惧種）というのを滋賀県の河辺いきものの森で見ましたがありますが、それはよく似ているもののかかなり小さな花で間違いようがないものでした。調べると両方ともサクラソウ科ですがハイハマボツスはハイハマボツス属、ハマボツスはオカトラノオ属ということでした。紛らわしい種名の付け方です。ハマダイ



ハマダイコン



ハマヒルガオ



ハスノハカズラ



ハマボス



ハイハマボス



アリマウmanosukusa



マルbau-tsugi

コンは海岸のみならず、琵琶湖のほとりにも見られ、高島市新旭に群生していました。白い四弁の花ですが少し赤味がかかり恥じらっているみたいでかわいいです。山菜の本にこんな記述を見つけました「栽培されていたダイコンが、人の手を離れて野生化したものだ(…中略…)そのため、ダイコンと違って根は固く、辛味が強い。野生化したハマダイコンを再び栽培

し、改良したものが守口ダイコンや波多野ダイコンである」、興味深い話ですね。

最後に行った森林公園は立派な場所だったと思いますが、今はすこし施設が荒れていました。しかし観察路は手入れされており楽しめました。目新しいものとしてはアリマウmanosukusa、葉の形が丸い耳をしたネズミの顔に見えます。ま

だ咲き残りの花があったマルbau-tsugi。いずれも初見のもので心にも記憶にも残りました。

梅雨も近づくと思地にはいろいろな花が咲き、その中にトキソウ(京都府絶滅危惧種)やカキラン(京都府準絶滅危惧種)が見受けられます。どちらも華やかで美しい花です。こうした花は盗掘によって減少しています。残念ながら今年は見に行くことが出来ませんでした。トキソウというのにも似たヤマトキソウというのがありますが、これは二度ほど見ただけです。トキソウは一茎一花、カキランは花序となり幾つもの花をつけます。名前



トキシウ



カキラン

大畦と呼ばれる畦から
田んぼでは
大畦と呼ば
れる畦から

か参加しま
した。かつ
て山間地の
田んぼでは
大畦と呼ば
れる畦から
アカン」と叱られたものです。私

し我ならなくに」(河原左大臣 古

生の実験を
里山大学と
して行つて
いました。

では貴重な花の草花が普通に生え
るようになりました。里山はまさ
に人の手が入ってこそその自然なの
です。里山大学に参加した始めの
頃は、教えてもらってもカキラン
やリンドウがよく分からず、つい
刈ってしまった。すると「こ
ら、それはカキランや、刈ったら
アカン」と叱られたものです。私

で見かけるランがあります。田ん
ぼの畦だったり公園や日当たりの
良い草地にぽつぽつと咲いてます。
数mmのピンクの小さな花がねじれ
ながら咲き上がっています。ここ
まで書くとな何の花が見当付きまし
たね。ネジバナです。これは最も
身近に見るランです。万葉集には
ねつこ草という名で登場し、百人
一首では「陸奥(みちのく)のし
のぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめに
し我ならなくに」(河原左大臣 古

の通り柿色の花弁と薄紅色に濃桃
色の幾筋かの条と部分的に白が入
る唇弁からなり見応えがあります。
退職後入学した岐阜県立森林文
化アカデミーでは里山研究会(植
物生態学を学ぶ)という専攻科に
属していました。そのT教授が
大垣市上石津の水田を使い里山再

山の斜面が続き、その斜面に生え
る木々によって田が影になること
から、年二回草刈りを行って草地
を保っていました。しかし放置さ
れた田んぼの大畦はかつて生育し
た草花は消えてしまいました。従
来のように春秋の二回草刈りを行
えばもとの植生が回復すると実験
を始めました。すると、春にはカ
キランやササユリが秋にはセンブ
リ、リンドウが、大畦上部にはモ
ウセンゴケが戻ってきました。今

にとつて、カキランはいつもこの
思い出がついて回り、如何に未熟
であつたかと思ひ出されます。
六月から七月にかけて身近な所



ネジバナ

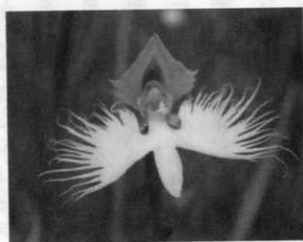
今集)として詠われているのは知る人も多いと思います。この中にある「もぢずり」がネジバナの別称です。このように日本人にとっては実に慣れ親しんだ草花です。あまりに可愛らしいので持ち帰って植えたりする人があるかも知れませんが、殆どの場合根付くことはありません。ラン科特有の菌類との共生をするため自生地に存在していた菌類が移った先に存在しないと、しばらくは自分の持つ栄養分で生きて、次代につなぐ栄養分を持てず消失してしまうことがあります。

ランの種類は多く、単子葉植物の中では最大の種数を誇るようです。またその多くの種の中には昆虫との共進化や菌類との関わりなどで多種多様な形態、生活スタイルを持っています。地面に生育す

る地生ラン、木の幹や枝について生育する着生ラン、菌類との関係を持ちながら光合成を行うもの、もはや葉緑素を持たず菌類に従属するものなど千変万化ともいえる進化を遂げています。美しい姿と相まって奥深い進化の姿が見え興味がつきない植物と言えます。

この小稿が皆さまにわたるころ、これが花ですかと思う造形の凄さの花が周辺の湿地に咲き出します。サギソウです。以前は普通にあったようですが、開発や盗掘ですっかり減ってしまいました。それでも滋賀県あたりには比較的容易に見る事ができます。見れば見るほどサギが飛んでいると思える形と純白の色に魅了されます。あわせてトンボソウの類も幾つか見られるのですが、これは大変よく似ていて種類の判別に悩みます。同じ

頃、山の中ではミヤマウズラが咲き出します。ウズラとはよく言ったもので葉の斑の入りが何となくそんな感じがします。一つの花は小さいのですが、正面からマクロズームで撮るとクリオネのようで実にかわいいのです。いっぺんで好きになってしまいました。是非この二つ見に出かけてみませんか。



サギソウ



ミヤマウズラン